



天物問答
全



1623
~ 5



天狗洞卷

全



天序
 ありと狗洞若と題を在し免作せり
 一母子
 の甘句「わが乳中」の林林の踏地を
 小もとと雪橋亭地と鳳皇の志の



安永癸巳秋

此の地むのしつ也此のるるん氏花下總の
境あるを之田川の中をりよひなりを結ひてひそ
く極岩のり石之字を連とてよ若りしより此
借の柱句を好て作しなふ食ををたれゆふ魚ふ
此事を知りてや我得たりと思ふより西清
見道坂の園をうち越えし島へのけはる
象浮の夕ぐれふ字地枕を伴つし或は
越ふよきり南海の便船しし心裏をよむし
とやかりとあらく石岩子意對し詞友お唐
ををたれせ何事なく世の能遊地告路となん

高きりりるさち〜長月十三日松常小来
るここ子と新古の句漢少春眼の交を外古
か下月の水面に氷をおもたし林ふたす竹
裏金と志けるあもむせなり字建唐とうたか
しそ今宵の月を賞せしもの之代集松不見
へんといへども紫式部か筆も十三日松の月
以てあやのまをけり兼好の法きくさるる妻
相清明なるもい良相と老と見へたりさうい
るさ句あらん有らんといふと物老といふ川で
百練也後

水鏡見とあたらしく後地月
洛陽花雲〜の月
比二句とあたらしく裏評と乞人といふ〜と
先生の高吟何れを甲とを乙へささるるあ〜
まらそ〜の句〜杖より其友をたり申秋を
以て月光ふ手と〜とせたる手つま〜人情
とあたらしく思て鏡ふ〜の鏡の鏡と次と
いへる高吟かよひ又誰知の鏡裏とつゝる
待の余情有て鏡の唱に歌なりといふ〜次
の句はた洛中洛外清きとあたらしく

いしゆをかく長月十日の事なり此松葉を以
情言ふ也而意をそめて嵐山大井川の
のさゆん今好むとあらふなりやう先生の
高禱少くとも詞意違ふちうちつと我の
業のさゆら滋陽の句なりとかく是をそ
の奥の意とありてと文様をいふも
何れなる時此門を音流して入来るは此
雅と見えは後優漢塞の流とむ行者
と云ふ事あるやうに字違ふ向て云我山皇の家
と云けて油乃名不來たりと直ふらん手
の

少くもあをきんて虚室を我去往中の人
是と云ふ事ある風情なり字違ふは夢子の夢
見る事なく此山伏をいふは事あるやうなる山
上なる山伏也我山城の玉土は撰りて
つかぬこと足村と云ふ天狗なりと云へく自己也
高慢をいふ也と云へく着偽と云ふは我山
昔より也と云へくせなり油能道と云ふ事
ありてと曹師の切也と云ふ罪を犯さん
の事なり行なり安と云ふらふは後河玉富士
の頃なり西人の録と云ふは代りの事なり

句敷を知らずいさ汝の高慢の句と申かんと而
ふ来とてさき白眼小志くつの一とていさ言連らる
ひく歌とてくくはふ実也峯ハ八葉少をいさ
聖の光雲洞あかやき寒さ肌骨よ通るこれ
史籍の志るは無此山より高きもの河を都
良香が文抄を感これ二三尺材声を頂か
あて枝葉束一也名山を汝一句を吐得る年
さる地高なりいさおのま一師の村、連年を利
学是くをかくし一とね周扇の柄ふらつかせく
花ゆくゆく志をくく一と原自水混たる河道ふい

たる氷の色琥珀くしと峯のまをいさ珠ととれたふ
似たり雲ふいあもくさるん後せ、緋約たる女瑠璃
の冠一貝列ぬ袂とひるかへ一五色の糸をいさ
織織ゆり高れ、扱とてえんらか免ふ字連を見
るやもそゆい様、軽あふをゆららと梅地白か
あやもか如し、さふあひて句かくん、常おゆり
か

見れよ又いさある根や、能河
二尺材、眼前の時空さ、有あ、是より下
界を志るも、玉上の絶縁をいさを、来とて

きたれとつとむくまふふ一帯をせし風を避て蒼々
物なる所不到る地云今須臾の間ふ云天と地く
りたるを忘るはやそと最その一層ハ事静天ふ
して満天の至宰あり其次を宗動の天といひ
そ次を恒星找ることふは天七曜のうへにさ
五星のものをふ進ゆかんといふ中しふるはれ方
髯といふ光面をわゆる地云是太ふ星あり夜
う地心と離るふり二百四十万なる十万里余程ふ
ちるを見ふ辰星あり此辰星より地と去事
九千八百七十里余ある歳は黄極の二星

地とをある里數ふといふ異なり又天府の
とて羽らうらう進ふに尺材か腰ふをかりとふ
翻々として或は福元ふせむ或は多雲ふふ
ていとの橋をせざる橋の在右に彩なるかといふ
者さゆり紫ゆり花たへさく虹の様ふをせん
行ふと二百安をかりとて樓門有り仰て是を
見えも陰冥を清虚之府といふ親をうらふ殿
七宝をちりともめたり跡を是をうらむといふへたる
桂樹有り其おほひさ大衆をふかすらん
さい十奴を限るへはるちありとふをひん教

の少女能衣をかきし白鷺ふあしと舞曲
とあまき宇建のやうと村小洞村云汝年ナカ
博聞と集て人をあまきとくくまもこの強
識よりけりたれいさきて宝造するもあまき
の明皇のゆきし目余ありまのうとまかえと
と根と撰よひ

柿蒲萄珊瑚と瑠璃の部

三尾村又良の方と申く花行とるま甘道也
かちちとあく批史と金を流つたとし名村と
山有良経年たると言徳つとるまのやれを

村云安、鞠陵山とて日月の出る所ありといふ
と守人と今述也あ少河と

目と目と常服と杖藜の山路

三尾村でかたなりもも師のともくつとあかん
あかとも一、蔚なる杖の杖の葉ふなる宇建
眼を向くまもい〜日本地ある〜とあまき
穂重の息いとあぬ免角とる申ふ山向と
とあして数目的笑ひ屋とあひま〜三尾村は
く〜守へ〜村云と安をん杖杖杖杖杖杖
あかん〜とけき〜と〜と〜と〜と〜と〜と

杖毒したる木の玉儀小りしつゝの岩窟有り傍に
尊火炎くくして多量の火をこししをるか住りて
此山の傍もしくは伸く路不基中をひたしき
其取腹子向い照目もや居れを子一鞍馬の僧正
村をすすへるやたりふ並居る至形の人として
二村をくくる山の麓を村土山岸のあ鬼村向
岸の相模村比叡の次郎村とを切へる其外
附類者属皆兵校を帯し巨鼻とうたふか
と列たりは時宇連石とあうつくもれに足
村好首とをかや御付とる宇連と石もひと

中せ山のまをけたる眼を免くし宇連と云
とあら御踏ふ身もるよ一やあふ秋く
洞昇りありし山崎の宗鑑を御踏
推ふ事としてゆりて所すたるの玉物も
し守捨かしてきて汝子限るに迄を次の句
を御し

棚の草籬に玉物櫛門
天狗もついで震子秋風
その鼻也高きとしか
驚もそののうと杖とんい

あし我天狗及を蔑し鳥類は一或五七
五多らあるよを女童のゆきむもの子かへて
そ物作諸をそしるは諸山の天狗のみを
少らるる所ありて汝とそく俳諧は厚
薄をさくらに罪の軽重を紅をとりむか具徳
老人の幽斎公田基と極もも侍少侍往して
先一切たりくとそ其谷たるをそまの句とそ
百金句の附あり昔の人かふるまは者とならそ
あかきもさきま高慢の沙汰なり我今前句を
あまへし弟子に戸村と汝云ふ百句の附を後

り運速をそまへし若汝はほかへんあまの山地
着属たる人しそれとゆきまは戸村ハ羽扇を
たのまゆ我とそそ兼向ふう運か傷ふは赫
たる銀盤と掛湯をたへし七箇の末は葉天
狗句あまそまのまをそへしとかな産を看てひか
たり山を眼前のまをそまの句とゆき

甘谷をまへそまの杖の山軍

附句
頭も雪たぐまして氷室守
脱捨と錦の袴製装束の衣
六尺坊
宇連

樹奈不麻さく草か漸基坂
兼好か来ぬ好向の梅子舟
顔ぬぬ旅かまの飯枕
昔と徳川と壺刺と海
湯子不淺温泉の浴衣忽後し
寛文吉水院のまゝこれい
組と丸丸船を其後草紙ん
木食の馳走と借子持家行
蠟燭とらへ娘のさくらさく
孝経の通ふ兄と弟と

坊 村 村 村 村 村 村

そのふ海に浮遊する雲墨
お雨の空あつて入日かけ
おさいとよめたりと糸と大坂と
近頃のと手て毛見の馳走と後
屋公事コタゴのそれありり子徳居か
賣物する屋四五枚革財布
腰あたる秤も折れお古金買
一匹のこ蚊や忘れる極世を
御茶園と麻目と梵唄と歌い
君常の膝履と持帰の兄弟

村 村 村 村 村 村 村

日世の例に耳邊に精白者
醉醺海に津のえく風の神奈
院壁段にまにまに松見
帰せしとわをそふ糸を付たり
に重ぬくともく田畑のいつたりと
榴神の音をたせぬいとあ審あれ
楠小兵糧をかり食はれし
流沙衣もらめてもいぬ安房を
たらくの勅使もあられぬのり
罪をうそ砒所の目地側きり

村建村建村全建村建村

實銭の音もたまに雨呼鳥
五月雨のあまのうらふ啼中蛙
鬼も一松浦ふ軍地事
もりくと全那王丸の由い登
夢多きあうくもこの師走に起りか
幼高ふ揚屋のあまのいさあかふ
棒きりか其蕎麦盛あけ根事統
穀廊の糸を去るりき道か
梅あまて公羽の居りぬあまれ
道風ふあまの匠平名を呼はれ

村建村建村建村建村建

たゞ二字二句

山聖の十塔のちのくをよせたり
山さしへ鯉のこゝろ君の代ふ
翔日の洲あおのく麻羽をとり
如急輪は土破の急果とや
まゝ舟子の教もいらはにはへと
葬孔の注文書をよみあひの
人相とよふにつかせぬ地をく
法螺目いさ山月三日觸りた
西行と文覺も茶も汲りて
源平の軍とやのちをさうりて

連坊 左 連坊 連坊 左 連坊

きふ事あふぬに金の持て
欠の路の尾いまいまぬと
女房も綿入り夕日いせまめ
比の餅をも波あふふ山
我奴もあかせうやれ
弁慶の掛ぬ手形持つた
三人世屋の宿代ちりの子
鉄炮の音もさくさく南無
吉備公の渡唐の供もこ
沿勢酒の硝子りりり

坊 連坊 連 左 坊 連坊 連坊

軽くと纏ふかきる麻ちりも
輝といとらかきりて居るあつ
田の渾身あつて置路中
重代の鉄行柳の暗けしと
あかきるち中風のさりをり
世の中七師走も知らぬ草花
内福の積もる纏ふ葉を馬
年々ふふ吹かしてあつて
涼風もふ吹かしてあつて
近及も湖水のうへの厚氷

坊連 坊連 坊連 坊連 坊連

茶をとまふまの附紐の好あつ
平傳と我もく知らぬあつて
見居て猫も細の孫抱うへ
接面を見見よあつての中細り
石のふ園子と伝なる雪あつ
あつてちる花の日教子十日料
横平ふ少作の祈松すあつ
元弘の乱も落さぬ首あつ
たあつての棺桶一つ置あつ
衣柳ふあつてはあつての袖あつ

坊連 坊連 坊連 坊連 坊連

之法の廊とてを淋しかり
ひよりけり 枯風高巻てを
拍子不別て人呼拍を
少使ふとての連なりける斬あり
清原さき告の言とまの意未
俳諧のあふ日 壁不既陀律
退屈お四月の先さきと
幽更いさすへのと 浪人
所至しん東の枝少遠より
惟光の何周梨お望む顔と

坊 連 坊 連 坊 連 坊 連 坊 連 坊 連

松島も波不湧日とてかぬ目と
つとよとあか火鉢の冬牡丹
さつとあか又教年とての
夏三月豆腐のあふと急なり
折ての茶罐とてを般若湯
緇きれて決らぬとてあをみる
此筆あふ十里四才の友何の也
酒造る泉とをけとて中を流

坊 連 坊 連 坊 連 坊 連 坊 連

既百句満尾あれかたの着属正連と
たむる字連五句おられたり山を眼とて

汝さきかしの正徳やして天下の御座るの事さき
まきしと罪少かきしれくま川不撻湯を倉
をせしとゆき日光山の黒雲坊銅杖をさくら
の純子とたのきくくくくくくくくくくくくく
茶飯師懺悔とて誠不復見の悪人天のお侍
かきしと知しは此道をもせり悟りしと存山今一たひ
人界不帰し治るは事と悟りつたて後事本
高慢の人をさきんゆかきくくくくくくくくく
世川不流を流せし山をさきくくくくくくくく
黒雲坊と船ととめく彼の今言所傳と有へんは

されとは傳ふ帰さし諸山の少事我個又少事
ありしとて我まかきしと汝是不神杖
悉是常の附句と百句をさきくくくくくくく
ゆきしと罪少きまきしと筆とてんまきしと
かきしと山の中らまきしと所れ禳杖の衆不きつと
りる山を一葉のまきしと
^{あひ}木の洞まきしと松半地鐘乃警か
神祇二十句
まてふ和布刈の禪 難 鐘
迂宮満りまきしと

宇建

箱為七浦告尾てちくもん
夢ももうつちを後くたむん
さけり時ふし神酒忘しを
深くとさふ森の背中台る
袍瘡神小乳身外く免る
祇園を居るとしの巻火
淨妙なる神出志河事
是も二人神直杖を懸
志願のこ嶽北而し河原木
名指を越る國ありてぬ

聖乃葦工水く生くおく
帆より行く蟻と神一あ
葉六葉不縛 忽空か
波小燈くそいつく島山
もあさぬ鳥も月ありか
石を西ふ浪たて
分具を神をさくかけ居
科戸の風あかきる大とし
みふ法く志んく神子の祀宣
龜燎ふちかき清土の名張

横も尾健くさくる君の代
あまの海北の神の宮
あ社集りししりあを
唯一傳授北湯垢離し結
田畑志津川で晴る雨乞
訂志あまを聖の舞神版
もとの水もあはる河合
磁石まかせしなる舟玉
釈教二十句
若狭と叫ぶ水もとく

ささぬ星を成る経行
本介ちるに聖北宗瑞
瓢のつるふりめくる七墓
甚本よ龍る故陸のあ在
いーさあふは及指とし
京を見た日の夢よ大佛
桓杖まらあし偏道と行
是も花守る風れ万柳
あてふあ尊も棟さうあ雪
誓切てあさむまあ

梵禪の修行ももつて火吹舟
 舳の衣の何れもを捨て
 佛を急の手廻り統者
 寺と海と何たりみまへ
 法所の軒と油所のもの
 聖の甚所の舳鞋子は
 棒のうらむを巻のちり火
 妙浩のさふ所を巻棒か
 題目謹言はふ可り也
 恋二十回

時分...もしも少若さや
 死をぬらふ事ある男か
 学かひさしとて法も拙燈
 田北水かけふ養力もあ
 若らぬやかまふ山の若か
 悟死の角北髪も編端
 守宮枕志多し筆を捲
 人へは佳しと撮のまし書
 紹と玉子と恨ふ一仄
 手水かけぬら顔のら川原

新なる香の縹ふ 法
何さ妻の舟の帰る 併ふに
揚陸むかひの 声花かきさる
枝も立りて 惣波、連た川
上手ふ湯女の 中風何らか
肩のうへかき 志もむの何
急も 驚ら 漸ふ 袖を しかる
沢産 播と 何ら 梅 外せ
紙懐の 何れと 丸線を
新し 枕香花 樹ふ 態 懇

狐のやうふ 更なる 狐より
志も 何れと 居て 泣ぬ 傾城
且那 何れと 何れと 何れと 何れと
鉄炮や 何れと 夫婦 何れと 何れと
星の 何れと 何れと 乳人 何れと
何れと 何れと 何れと 何れと 何れと
飛子 何れと 何れと 何れと 何れと
典作 何れと 何れと 何れと 何れと
綴衣 二布 何れと 何れと 何れと
舟の 何れと 何れと 何れと 何れと

無常二十句

煙ふるふる鳥部 聖なる月
人魂しるるたる心とて 死ぬる
遺教経に 一家よりまゝ
猫と出ると 権ふ老僧
百首重なる 衰屋のつと
経帷子と強もぬふ こと
覚悟と 業多 辞 世つら
さぬふ 業の心も 夏白水
湯灌ふ 鏡と角力友達

力おとす 業漬 ぬく 知る
聖者のまゝ かく 古塚
宗者 遠し 終北 十念
軍 散し 卒都 濃のち ち
しり 破 船 小 活て 忙 然
定を弘 誓の 舟 小 亡 骸
と ち 悟 千 袖 忘 ち
枕 小 白 心 鉛 杖 活 ち
柳 心 籠 の 柳 乃 是 常 迅 速
洒 乃 是 見 の や う ぶ 引 守

笑いと居るもなれば 宜地

漸 百句附 何れもく 吟 終まに 山を 園扇
とよとくく 彼を ちかちか せと ちか 声の下
より 片村 ちかちか 角先 ちかちか 右底 扱
も 思ひ ちかちか 我 ちかちか 右の 極中
忙花と 眼を 刺す 夢 ちかちか 又 ちかちか あり
曾の ちかちか ちかちか 狐の 句を 解りて 又 其 業
いか ちかちか 字を 違 誤を 改め 我 一 睡
の ちかちか 魔界 ちかちか ぬき ちかちか ちかちか
得 ちかちか 連中 ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

へも 唇寒し ちかちか 禁戒を まじく ちかちか ちかちか
の 哥仙 ちかちか ちかちか ちかちか 昔 山 川の ちかちか ちかちか

歌仙

浴湯の 雲 ちかちか 後 花 月 宗 達
立 ちかちか 見 ちかちか 山 ちかちか 秋 林 江
重代 ちかちか ちかちか 一本 ちかちか ちかちか 那 親
象 兩 ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか 加 南
諸 然 ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか 羅 九
ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか 是 品
右の ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか 凡 部

揺らむかしとみま。 陀と
たをいふゆゑく香の馳走を
綴子の唐子まらねか
蕙草のつらむる星を解
向漕くと長くうら
松風は琴の吹くもか
許し茶かひく書字の
下ふそ娘の秋い
携を守りしと送るを
有のくふれい花の

九都遠九呂親南達醒に

雛子とま雲雀子里
一列乃着は久小内裏い
浄身よりとがり人
狂言のまほほつ馬の
五升の酒の所
細長は森の鐘の時
悟元をよけのま
ゆく氷の舟の
おもしろい求肥
此うい和尙子

九親南遠都呂親八達南

帯は直ぐち五川に逢たつ
目ねはしよしとてぬるも
としく青いさ言れぬを
色鳥の揚る海と新を
戸と縁かけて星の本 陳
申匠の給も袴も紳さむ
よかきぬおのの髪も
よ見くく花の自慢も
世界は七重八重を陰と刻

遠都仁親九品都遠達

下之巻

歌仙

うゝ枯也とちりく水の音
猪追の月を田たれ月
七夕ふりうも昔の巻か
正かきと極不待か
樽酒乃主水司か
霜降りる家地鳥の如
勝沼地冬着と掃も
徳本能千枝ハ

鳳皇
太皇太后
皇太后
皇太后

ふれさししと、内儀、破箱
晦日の小舟いさる君の那
たをかれおゆか、来つる物鯉
揚も浮きと、汐をらよし
年とを海をさし、打かたけ
をぬき、くさく、何とせんか
と、い、火のうら、く、汁、ふ、高、野
を、い、て、も、梅、下、神、鏡、の、目
を、ぬ、く、下、部、の、跡、る、を、と、地、春
道、親、お、ふ、道、か、は、む、む、なる

、 是 太 是 太 是 太 是 太 是

又、侍、中、の、源、を、つ、ふ、河、う、下
孫、見、く、志、き、く、る、匠、者、お、ま、り
深、院、佛、お、揚、屋、を、き、く、る、お、ま、り
世、ふ、く、れ、の、孫、島、お、ま、り、やく
喰、い、の、あ、ふ、近、及、ふ、ま、り、あ、う、く
か、は、る、洞、土、屋、お、ま、り、五、塔、時、宣
柱、を、ぬ、蟻、と、く、日、の、影、み、を、り
権、の、供、お、り、二、所、お、り、入、し
辛、崎、の、養、白、と、鳴、牛、と、お、り、中
字、難、と、お、り、お、り、お、り、お、り

是 太 是 太 是 太 是 太 是

う
 中のくもなき月夜の
 秋
 袂の
 善提子の
 まさ
 樽の
 雲の
 ちよこ

太・足・太足、太

四時

菜の花や 芝の
 青梅や 馬の
 草花や
 一日の
 秋の日

夕佳任針来

馬や 籠の冠を
 見ん

天府
 波女心
 千慮
 丹頂
 杖汎
 竹翁
 百頁
 乳峯

ちるものよ果ては海は漸く
柳見と柳見しとあはれ
秋は越るあはれ也雲の峰
暮の花えくくし秋の
河原くまの男の由の男の
為也行くくくし秋の
五月あはれ暗き花の葉若峰
陽貴也人月は軒小おのつかに
後の世に鮫あはれむ神た
とくくくくくくく梅は白ひが

芳堂
葵太
心親
山幸
桃鏡
水光
真蘊
鬼守
慎車
鳳足

くか和也国守は海る者
糸がけくくくく色は秋り
唇と見とくくくく花
柳もくくくくくくく
他人くくくくくくく
燈籠也手をつくくくく
殆着くくくくくくく
縮つくくくくくくく
水お首白青くくくくく
真菊也黄くくくくく

石葛
夷流
松隣
人た
如風
葵太
鳳足
六河
乙兒
是物

と好見と云ふ花を春の香
や田中一花のさくら日あけの
叶のまばらある一木の花
まらぬ目もさくら枝うた
かく清くあはれさな散紅葉
ついでと人を見るんぞ月
梅折り端上道行く月
あたらぬのほろほろの
花さくらを暖き二月晦日
一休ふくさくは成也前

女
三思
女
萱峰
鳳足
吐月
眠我
虚舟
富屋
鳳宿
女
菊室

我の事を海よりり
人形や花の小鮎の山
渡ふふと花后やさ
岩土買ふ山をある男の那
昔柳也つとをやり
梅さく日思ふと細路
暮れと雲ゆく花をいけ
いたつてを君也少ねふ
春の目よまかせとめ
何か左の柳柳と水札

蓼太
心観
呉延
鳳足
逸賀
文母
六窓
真種
對賀
山幸

秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流

五松
文成
北魚
龜求
普成
鬼秀
回國
竹條
黙我

秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流
秋の流

蕪也
秋梧
鳳足
菊牛
吐江
蕪太
白門
意長
常向
蕪桂

咳一守て多札地をかしは
夕立地をさそふ如く後戸の
や水かへり清きを後戸の
堂を貫く春の杖見の
おほかたの園をたんとさす
まーさるうー枯さむー揺れ舟
石目を君の心なり乃なり
うらりまぬれをふれ地を
おほかたの園をたんとさす
山守の人ーしらふ心り春の
白

舎梅 玉斧 五嶺 鳴翠 翠鬢 川芦 心觀 眞蘊 葵太 鳳呈

入相を包むる堂の牡丹の
石目も流るる心はからり川
撰集をたつぬてこそは落の
ふきとハ後戸編り 堂
おほかたの園をたんとさす
静さの皆戸をのりて田
おほかたの園をたんとさす
おほかたの園をたんとさす
おほかたの園をたんとさす
おほかたの園をたんとさす
おほかたの園をたんとさす

女 菊経 菊路 鳥曉 松尾 豊扇 鳥尖 葉仙 全得 吏中 鳳呈

二月日不池をくつたを煙系
松く水ももる也梨花
日くも也日か、道も舞の雪
寺くもりもまき枯野い
うましくも人のまねも菊更が
深もつふ一反のしれま
源くも也六月猶も水地考
高成を花の甘日や虫縛
深雲も昭子しりもやも月
志たりも潤も春も物ま

班石
嵐亭
千之
其水
氣立
仙風
魚没
松帛
荻太
湖雪

松山の流もくもく氷も
鳴りもく山又うもく雅も
魂撫や子代をたかたら舟柱
流もも葉山子の片も落も水
く前ももれも力も冬も養
角も也何も大得もたの寒も心
解もあも秋もも故郷も家
解もあもかうも雪の氷柱も
物も心の舟もも人も月も雪の目
りもも也花もももし

湖舟
後山
鳳皇
渡江
南風
玉色
巨龍
女子世
持龍
養耳

昭々としてゆくも 秋の水
落る日と枯るを 見る御舞の
五十年 菊を 粧して 梧桐の
装束 扇を 持して 吹のりり
うす 枯や 鏡の 見る 宮と あり
かきまかせ 子と 思ふ 草の つる
石目や けし 軒の 空の 手と せん
爽に 植えて 待てる 松也 一松 鮎
下戸 来る 扇の 風や 後の 月
春も とも やま ねち ちり ぬ 山さき

牛家 鳳足 白牛 班象 連汎 爽太 祇什 祇三 花明 素丸

夕立也 雲は 春かて 二月の 月
あつと 六十月の 菊の 池の 水
あつと 氷も 可ぬ 川
され 風や 呼ぶ なる 風
道も 来る 及 秋の 春
目を みる 春と 花の 花
あつと の 滝も 是の 根の 花
ちり ちり 花も 思ひ 紅葉の
あつと 花の つり 池の 月
暮れ の 花も 思ふ 池の 月

鳳足 千牛 飛虎 花足 湖崖 翠羽 鷺川 蕉雨 聖雄 後白

あかつき氷と字を細成
軽舟のちりめとらに女
うらむきの盟は種と習
風の岸へはまふ千智
を川の奥越えぬ秋の
うらむきの盟は種と習
女は若菜を春をわらふ
山陰の月かいて田種
もく秋も揚をわらふ
もく秋も揚をわらふ

女
場花
鯉半
桂府
鬼洲
鳳足
文尺
宗器
葵太
花口
葵人

月涼し水少橋を
もく秋も揚をわらふ
方丈のこまをわらふ
雪解と志きりな
魚屋のこまをわらふ
ゆきもる友をわらふ
睦し心なましく
髪をわらふ
そのつらの一
を魚とわらふ

赤目
鳳足
雪凍
真雨
心親
半筆
盤中
一得
鳳足
咏雉

かろる人勤てうけみま
信麻人まら関也 秋のこれ
木のちふぬーハ人のさくじ
若柳也我れゆかそ身ひらん
まら雪也大根わーた菘のう
細うある月のまーの也虫の戸
土雲の千のうま及也地の花
後世の志ぬ出ふそ輪舟
雪也故少ふかりし藪あ
炉南也たかまのまらうは四人

信史 春安 深玄 澁義 新約 長羽 鳳足 子交

さきくらし 岩園地海も梅花
海苔地香も魚も水も心も
風もれ燕も解も松も那
名月の雪も山も梅も白も
わさしとまらうふ梅地白も
酒家ふ或日下る山もく
名月と待てて梅も土雲も
雪も又もまらうは四人

宣麦 斗水 汀雨 平甚 子與 千茶 歌童 鳳足

深きしりり錦七果の衣が
雞頭也松竹の目也新事の
銀燭を照かす下り菊の花
萩系也梅少部をつらとて
湖さのうちせたり少相結
笠履と先旅着の巨魁が
義虫也あらやたさよ海
川風や雪がけけいそん
粟池の空さく人さるる花
藤系也昔花錦さるる

鏡平 米丈 檝窓 子得 前暖 何人 連支 鳳足 米汁 黒花

ささきもや田毎の月を渡り
相いさるぬ志望あり郭公
鳴さくも眠るる春の風
関子馬らかき甚丹の向
関の戸乃たあさおけ酒
ま女棟也夢さ帯り暁雲
とさ来さけん之原を種月
秋の風葉甚若小雛を
風や紐さるる茶湯山
義虫さるる也越の人

雨考 太喬 故一 友鳴 白翅 鳳足 丸水 菘太 神魚 卯雲

先帝の室のりふりてと乾秋
食穀の味もかきまき果瓜
きぬに裏かきなる路巾
鶏卵やひしり安をそ秋の月
柳ふりかひしり春の雨
段喰を旭あつむる二月
風やとるひかきる抄柳
やちんのかきとる根糸料
まら塔やまきか心か
ゆい見この後か時鳥

真蘆 鳳足 山幸 官氣 楚水 倉氣 之冬 杜吾 石意 言顔

葛浦の軒少重人の水柱
富たつとくまをそひかき母
楓神のまきとる月
産覺しとる月
離市やうれ海たる二月
おそらしとる口とる喰
木の端とる月とる物
芍女出や日枝とる花の春
豆かきとる月とる秋
草指もとる月とる山

鳳足 蘇太 園丸 一鷲 和氷 龍舎 大斗 車時雨 兔明 依園

雲とある鳥とあり郭公
雪とある鳥とあり郭公
雪とある鳥とあり郭公
雪とある鳥とあり郭公
雪とある鳥とあり郭公
雪とある鳥とあり郭公
雪とある鳥とあり郭公
雪とある鳥とあり郭公
雪とある鳥とあり郭公
雪とある鳥とあり郭公

起石
去釣
千支
和星
南羅
彭壽
其人
桃稚
後言
浩梅

春雨也紙魚の葉ありは青葉
三法いも江をさへはち津ら月
おそらさき方と羽かそは故陸に
葉をさるやうな意也さきの秋
虫土質を却り秋をさる松ド
一松一富士作る時ある
冬雪といは鐘のうり花の春
麦時や綿木たてたかほり
魚いそらわたら底所の清水に
をい鳥やふいふのふ水あり

取得
全島
元子
之伸
須六
松柯
奇峰
梧泉
杖老
桃産

これ風や入目なる城の春
草の葉を色かしてきたり秋の情
台の雲着て時雨り富士の
魂概やとら抱ひとらよむの月
時雨の雲か先六日と部
山吹やせんたぐ川を流る
水音の河の細目なり花
石目や十家小蕎麦や五家酒
海棠や心も春にかたかむ
相の男小葉あし美若るな

雅堂
梅春
首演
巴人
具牛
居邊
葵潭
盤古
葉守
菊平

秋を去しのおう指はも麦の秋
推更りの信有るまの六家仙
とら抱ふ市人さくくれ
歌よある羽子つらじや暗
見かせ山王社とら
おとらひさぬの恥か
我魂のゆるる粒もさ
あまふ雨もてをや田植
風情もそやのねのかねの
衣手の里あつてよれ若葉指

其時雨
周竹
也
八
曉
蝶羅
柳雨
諸九
素月

其知何よりをよめるぬ 上毛 物種
 糸花やとらふの才の末の 毛 雨
 蜘蛛の網を以ての扉の那 常呂龍子島 尺樹
 鬼ももる卧椅の床やめり花 下總 梅雲
 指す木も古実もも来り 三原 眠江
 風可橋ふとめを 有馬 巴水
 獲目 有馬 玉露
 蜂の巣や花の 有馬 露
 うす括のね 有馬 露
 そのより 有馬 露

晴可眠ふ 上總高根 吏仙
 明日 カハナ 虫の声
 啼止 相次 猫の意
 花 中田 魚尺
 さ 小田原 石髪
 さ 小野 尻
 さ 真々 魚行
 さ 仙府 橙司
 さ 福島 林江
 さ 二本松 一声

埋史也 庚をくまはれ也 芥也 香
 若史也 く 雞波のく 地松葉
 散るが 足馬行 花のるく 下
 旅人 小日笠 曲つる 柳向のく
 馬か 榎のく 柳のく 星のく かのく
 馬よ かのく まのく さのく 初梅
 おそら かのく 山口のく 也 鎌のく
 新の 柳 瓢の 百の 月 柳の 香

八丁の 菊 徳
 白羽上 山 投 茶
 葛 蘭
 尾曾根 士 峯
 与 野 和 文
 赤岩 帰 景
 川藤 蓬 戸
 江 邦 風 折
 稲 牛
 鳳 足



